図 書 紹 介・New publications

日本産稚魚図鑑　An Atlas of the Early Stage Fishes in Japan.　沖山宗雄編 M. Okiyama, ed. 1988. 東海大学出版会　Tokai Univ. Press, Tokyo, xii+1154 pp.　19×26.5 cm, 2.54 kg.　¥18,000.

重い本である．物理的には2.54 kg，指で弾いて動く重さではない．しかし内容の密度の濃さ，重さはどうやら物理的重量をはるかに上回っている．

編者沖山宗雄氏は，"既往の知見を網羅した成書の刊行"を目標にしたと緒言で述べている．その目的をほぼ完全に達した上に，新しい（既往でない）知見まで貪欲に取り入れた，とんでもない網羅物が誕生したのである．

対象は日本周辺にみられる硬骨魚の稚魚であり，それぞれが図示解説されている．大部分の種では成長段階にともなういくつかのステージが含まれている．解説は和名，和属名，学名，計数形質，形態，類似種との区別点，分布，執筆者（文責者），文献番号の順になっている．図は全て白黒で，解説に近い場所に，多くは独立ページにまとめられている．約 1,100 種が含まれるとされ，親が属段階，科段階迄しか特定できないものも sp. として登載されている．複数の場合は sp. 1, sp. 2 というふうに表記されている．

そのほかに池田知司・水戸　敏両氏による，おもに海産浮遊性の卵とふ化仔魚の検索が，本体の後ろに独立して含まれる．

この一冊があれば，少なくとも従来の日本周辺の稚魚についての知見を一覧することが出来る．

執筆者は編者を含めて 26 人であり，そのほかに第二著者としてのみ名前の出る共同執筆者が 14 人いる．執筆者陣を見て気が付くことは 20 歳台を含む若手の研究者と民間調査会社に所属する人が多いことである．活気と情熱と良心をもって執筆したことが伝わってくる．

この本で初めて稚魚が図示解説された種類が多数含まれている．また，日本で初記録（稚魚のみ）の種も含まれ，和名が新たに提唱された種類も多い．その意味でこれは図鑑の範疇をこえた，原著としての性格も併せ持っている．著者らは，それまでに各自が蓄積した未発表の知見を，惜しげもなくこの本の為に提供している．一方外国の文献からの引用も一部にみられるが，引用の基準は日本周辺に出現する種，または日本産種に酷似種に限られているようである．

この本は日本だけでなく世界に誇りうる，また世界的に利用されるべき卓越した出版物である．それだけに日本人以外の利用者に対する配慮が皆無に近いことは大変惜しい残念なことと思われる．

発行所，編者（執筆者陣はもちろん）の欧文 address がない．従って入手方法も，どこにどう連絡，照会すれば良いかも判らない．緒言，謝辞，凡例，目次，解説，解説者（文責者）はすべて和文．特に凡例に日本語訳術語の原語が無い．日本人以外は学名等を頼りにするしかない．

原著の部分が多数含まれることは，世界的に引用されなければならない性格を持っていることである．オリジナルな学術的知見が和文のみで発表されていることは，明治時代ならともかく，現在ではほとんど考えられないことであり，更に強くいえば，許されないと世界の非難をあびるかもしれない．いずれにしろ，この本の一部を引用したい日本人以外の研究者は，途方に暮れることであろう．オリジナル部分だけでも何か配慮が欲しかったと思う．

次の刷り版で，最低是非していただきたいことがある．扉に出版者の英名を入れること，解説者名のローマ字表記を各解説の後に付けることの二点である．

もう一つ大変に残念なことがある．多数含まれる原図，原解説の基となった標本の所在，番号が示されていないことである．日本の稚魚の研究者はこの本に限らず，標本を明示しないことが多いが，これは悪い慣行と思う．今からでも遅くない（ことを祈る）．必要性の認められる，判るものだけでよい．標本の所在を明確にし，次の機会に小さな活字でよいから，その情報を付録に付け加えられたらと思う．標本は，後々確かめられるように，なるべく公的な場所で模式標本に準ずる慎重な保管をしていただきたいと思う．

以下，気がついた細かいことを指摘することとする．

著者が多数であることが主な原因とみられる体裁の不統一が散見される．

目次は科名の羅列であり，4ページにわたっていてほとんど役にたたない．

稚魚の図は引用しにくい．図番号をつけていただきたかった．通し番号のついているのは，解説図だけである．種の図の下に書いてある学名とそれに続く引用文献の表記が学名の著者と紛らわしい場合がある．これは本誌投稿論文などにもよくみられる一般的な不注意なので，この際特に指摘しておきたい．学名の直後に原著者でない文献（著者名及び年号）を括弧付きで引用するのは避けるべきである．

計数形質の一覧表は稚魚の同定に欠かせないものであ

るか，成魚の研究者にとっても有用なものである．この大きな本の中に散在している表の目次がほしかった．

和名と学名の索引がある．属名は人により適用するものが異なり，往々にして変更されるから，学名は種名からも引けるように工夫してほしかった．表 38 に含まれる不明種が，和名索引に奇妙な形で収録されている．

引用文献は 1,220 篇の多きを数え，通し番号がついている．この文献表は独立したものとしても大変有用で価値がある．そのうち和文のものは，著者・表題とも和文でしか出ていないが，和文でどのような業績があるのか日本人以外に紹介する絶好の場所であったのにと惜しまれる．

本体と，卵とふ化仔魚の部分とに全く重複した図が幾つかある．改訂の際は魚卵やふ化仔魚の図も本体部分の各種の所にまとめてほしい．

いろいろ指摘をしたが，次の改訂の時の参考になれば幸いである．

編者および執筆者の，並々ならぬ努力と苦労に深い敬意を払うものである．これは網羅の精神に徹した，地道でしたたかな叩き台である．さらに充実した将来の出版物の誕生を，心から願っている．

(富永義昭 Yoshiaki Tominaga)

学名の話．平嶋義宏著．1989． 九州大学出版会，福岡．ii＋380 pp．A 5 判．

本誌 35 (2)．p. 220 に清水 長氏が‘現在最も有用な書籍’と紹介された「蝶の学名」の著者による新著である．著者は昆虫学者であるが，本書は表題通り「学名の話」であって，著者のあとがきにもあるように‘学名について知りたい方々の期待に充分応え得る解説’と思う．

II 章「学名の話」は，学名の形式，属名とその由来，ギリシャ語の複合語，種名とその由来，属名の性の 5 節から成る．魚を含む興味深い例を豊富に示しながら進められる命名規約やギリシャ語・ラテン語の解説に，著者の該博な知識，特に古典語文法についての深い学殖がうかがわれる．しかも，実用上極めて便利な形式で解説されている．例えば，ギリシャ語を語源とする学名ではギリシャ語をラテン語に書き換える必要があるが，そのための規則が一つ一つ例を挙げながら 2 ページ余にわたる一覧表で示されている．

III 章「学名ノート」は，再び豊富に例を引きながらの解説であるが，特に (5) 節「面白い名前，間違った名前：魚の巻」は，タイトルの通り専ら魚名の話で，筆者の一人木村も協力したものである．「学名」の項では，ギンザメ *Chimaera phantasma* の属名はギリシャ神話の口から火を吐く怪獣 Chimaira から，種名はギリシャ語の幽霊から，ツノガレイの属名 *Pleuronectes* はギリシャ語で体の側面で泳ぐものを意味するなど，魚の学名の語源について興味深い例がいろいろな関連事項と共に解説されている．「スペルの間違い」では，シュモクザメの属名 *Sphyrna* はギリシャ語の sphyra (ハンマー) に由来するから正しくは *Sphyra* とならねばならなかった，アカエイの属名 *Dasyatis* はギリシャ語の dasys (毛深い) と batis (えい) の複合語だから *Dasybatis* となるべきものである，などの例が挙げられている．「属名の性と形容詞の種名の不一致」では，‘ニギス属を *Glossanodon* という．これはギリシャ語で gloss^{a} (舌)，a-(an-) (否)，odon (歯) の複合語，後者は男性名詞であるから *Glossanodon* も男性である．従ってニギスの種名 *semifasciata* (やや帯状の) はラテン語の複合語の形容詞であるから男性形となるのが正しく，*Glossanodon semifasciatus* と訂正せねばならない’，などと多くの例について教えられる．

本文は 941 の § に細分され，巻末の 46 ページにわたる「学名・古典語索引」により，属名，種名，その他関連の語の解説を § 番号に従って容易に見いだすことが出来る．著者は学名に関する辞書の執筆も準備している由であるが，本書も辞書としての機能を兼ね備えていると言えよう．

なお本書は「科学と実験」，「ちょうちょう」などに発表したものを骨子としているが，全編を通じてかなり調整・加筆してあり，例えば II 章「学名の話」では，第 1 節を除く他の 4 節はすべて新しく書き下ろされたものである．

著者は筆者らの所属する学部の先輩（九州大学名誉教授，現バングラデッシュ農業大学院派遣専門家団長）で，日頃その学殖に親しく接していた者として，紹介させて頂いた．

(板沢靖男 Yasuo Itazawa・木村清朗 Seirô Kimura)